ABPOPA

発行所
〒 162-0053 東京都新宿区原町 1-28
恵雅堂出版内 哈爾濱学院連絡所
TEL03-3203-4754 FAX 03-3207-5909
http://www.keigado.co.jp/p/haerbin/

第 22 回（最終回）

ハルビン学院 記念碑祭

2025（令和７）年 10 月 10 日（金）
東京・高尾霊園

哈爾濱富士高等女学校校舎

10月10日（金）、東京高尾霊園にて第22回となる最後の記念碑祭が行われました。1999年から同窓生達が集ってきた記念碑祭ですが、開校から105年、1945（昭和20）年８月の閉校から80年の節目である今回をもって幕を下すことになりました。今回10月の午後開催としましたのは、猛暑リスクを避けるためと懇親会の時間を設けたことによります。参加者約90名が集まるなか、哈爾濱学院卒業生・関係者、哈爾濱富士高等女学校の卒業生から分骨（４名）と遺品（３名）をお預かりし、記念碑地下カロートにお納めし、前回に引き続き学院生としてただお１人参加の26期奥田さんから、参加者を励ますご挨拶をいただきました。

訃報　2024年以降判明者

謹んで御冥福をお祈り申し上げます

18期	奥津	仁也	2022年
21期	平	文雄	2020年 3 月13日
22期	杉山	實	2020年 8 月12日
22期	中村	克郎	2021年 5 月 6 日
22期	朝	満	2022年 8 月12日
23期	大心池	洋	2024年 5 月 5 日
24期	野副	繁	2021年11月30日
24期	杉山	修	2023年 9 月
25期	永田	清治	2020年
26期	赤羽	壽行	2024年 1 月26日
26期	宮地	昭雄	2024年 4 月28日

哈爾濱富士高等女学校

4 回生	濱口	光恵	2021年 7 月18日
6 回生	宮丸多喜子		2024年 3 月31日
6 回生	中野	智枝	2022年 8 月 5 日
6 回生	麻田	雅子	2024年12月 3 日
8 回生	車	成子	2024年11月16日
10回生	大場	和子	2022年 2 月
10回生	石田	發子	2023年12月29日
11回生	猪口千鶴子		2023年 3 月15日

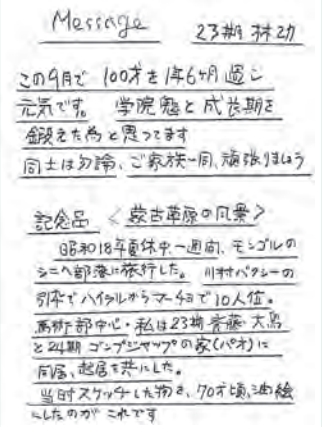
記念碑祭最終回を盛り上げる懇親会となりました！

今回は記念碑祭最終回ということで、できるだけ多くの方が参加できるよう開始を午後からとし、また参加者の皆さん同士で少しでも交流ができるようにと考え、懇親会という時間を設けさせていただきました。そのような折に8期寄友壮一さんのご遺骨が没後80年目にご家族のもとに返還されたという話題もあり、懇親会は和気藹々だけでない、参加者みなさんの思いが溢れた時間となりました。

太田晃弘さん
（13期 寄友さん孫）

田中洋之さん
（毎日新聞記者）

101歳６ヶ月の23期 林 功さんをはじめ、３名の学院生よりお元気なメッセージをいただきました。


Message　23期 林 功

この9月で 100才を1年6ヶ月過ぎ
元気です。学院魂と成長期を
鍛えた為と思ってます
同士は勿論、ご家族一同、頑張りましょう

記念品 ＜蒙古草原の風景＞
昭和18年夏休み一週間、モンゴルの
シニヘ部落に旅行した。川村バクシーの
引率でハイラルからマーチョで10人位。
馬術部中心・私は23期 斉藤・大島
と24期 ゴンブジャップの安(パオ)に
同居、起居を共にした。
当時スケッチした物を、70才頃、油絵
にしたのがこれです

23 期　林　　功さん
26 期　末松信弥さん
26 期　藤井　登さん

分骨・遺品 本年収納させていただきました

※（　）はご遺族名

13期	寄友　壮一　分骨（太田尚子・太田晃弘）
20期	脇本　正夫　分骨（紙透　由佳・脇本　章）
22期	原田甲子郎妻・原田美智子　分骨（福原紀子）
26期	奥田　哲夫　第21回記念碑祭記事の掲載新聞
高女2回生	上野　鈴子　結婚写真（太田尚子・太田晃弘）
高女6回生	麻田　雅子　分骨（麻田恭一、麻田良平）
高女8回生	車　　成子　腕時計（車　克成）

この他、高女濱口光恵さんご遺族池田眞千子さんから『哈爾濱鉄路病院1929』と刻印された鍋を連絡所がお預かりしました。ハルビンの歴史が刻まれた物として大切に保管いたします。

За здоровье!

夜はチャイカに30名が集まりました。
17:30 ～ 21:00

最後の記念碑祭ということで、わざわざ上京された皆様とゆっくりお話ができればと考え、高田馬場「チャイカ」でのお食事会を企画したところ、30名が参加されました。記念碑祭は欠席で、こちらだけ参加の方も３名いらっしゃいました。企画はしたものの、集まるのは同窓生本人ではなく、期もばらばらの家族だけの食事会です。どのような食事会になるのか連絡所としては大いに心配だったのですが、蓋を開けてみれば、父親たちの思い出を子供たちが熱く語り合うという不思議なことになり、店のスタッフ、カメラマンも驚くほどで、まるで「同窓会」そのものでした。乾杯は伊東敏さん（9期 伊東亨さん三男）にお願いしました。

13期 寄友壮一さん　分骨収納までの経緯

今日、分骨収納する学院生に13期の寄友壮一さんがいらっしゃいます。寄友さんは、同窓会名簿13期の最後に遺族の名前もなく「コムソモリスク病院で病死　故人」とだけ記されていた方です。2000年の第２回の記念碑祭で妻の上野鈴子さんにより、遺品としてバックル１個が収納されていますが、分骨収納は逝去から80年目のこととなります。

きっかけは今回娘の太田尚子さんから届いた返信ハガキでした。通信欄に「父の遺骨が昨年暮れにDNA鑑定の結果戻ってきました」とありました。

今年の８月27日に、連絡所に毎日新聞学芸部の田中洋之さんが、毎日OBの飯島さんと一緒に取材の相談に見えられました。その際、何気なく尚子さんのハガキをお見せしたことから、思いがけず事態が動き始めました。

田中さんから「分骨のご希望をお尋ねしたらどうですか？」という提案があり、ネットで調べてみると、昨年11月22日付の毎日新聞神奈川県版に「父の遺骨 遺族の元に シベリア抑留DNA鑑定で特定」という見出しで、自宅を訪れた県職員から厚労省で保管されていた遺骨が返還される様子が記事となっていました。遺骨返還からすでに半年以上が経過していましたが、ダメ元で尚子さんに電話をしたところ、まだご遺骨が手元にあることがわかり９月４日に自宅をお訪ねしました。この時、田中記者にも同行していただきました。

寄友壮一さんの出征は1945年５月23日、尚子さんは４ヶ月後の９月27日に生まれたので、自分はまったく父親のことを知らず、意識したこともなく育ったとのことでした。

1950年に寄友さん死亡の報を伝えたのは、寄友さんの最後を知る部隊の上官でした。これにより、寄友さんがハバロフスク地方のゴーリン収容所で1945年の12月の暮れに通訳の過労と風土病で亡くなったことがわかりました。鈴子さんは1974年に神奈川県遺族会のシベリア墓参に参加しましたが、当時はまだゴーリンは外国人には開放されておらず、訪問を許されたのはハバロフスク空港近くの日本人墓地でした。鈴子さんはこの旅行後に編まれた文集に、「私の命の絶ゆるまで、悲しみのともし火は消えることは無いと思う。しかしこの旅行を機会に第二の人生の出発点とし、今後生活して行きたい」という言葉を残しています。

ゴーリン居住地区墓地
第５収容所 第4923野戦病院墓地
出典：「厚生労働省社会・援護局事業課」

寄友壮一さんと鈴子さん　昭和19年12月23日

第２回の記念碑祭に名簿に記載のなかった鈴子さんが突然出席されたのは、前年に始まった記念碑祭の新聞報道によって初めて哈爾濱学院同窓会の存在を知ったからと思われます。尚子さん宅にあった資料から、鈴子さんが桃山小学校とハルビン富士高女の双方の出身であることもわかりました。鈴子さんの戦後は同窓会どころではなかったのでしょう。５年間ご主人の帰還を心待ちにし、死亡通知を受け取ってからは、必死に働きながら一人娘の尚子さんを育てられたことが想像されるのです。鈴子さんが上野姓のままだったのは結婚式後の入籍遅れによるもので、混乱の中で実家のある川崎市に引き揚げてからも山口県の寄友家とは疎遠のまま、2013年に90歳で亡くなられました。

（連絡所・麻田）

この報告の後に、毎日新聞の田中記者から厚労省による戦没者遺骨収集事業とDNA鑑定について詳しい説明をいただき、最後に寄友さんの孫にあたる太田晃弘さんから、自己紹介に続けて記事をめぐる状況説明をしていただきました。晃弘さんは、ご自分の「ファミリーヒストリー」のあまりの急展開に戸惑いと喜びが相半ばするという様子でした。その晃弘さんと連絡をとってくださった田中記者は、80年以上縁が途切れていた寄友家の人々まで探し出し、その過程で寄友壮一さんと同じ豊浦中学校（山口県下関市）出身の哈爾濱学院８期岩永静雄さんの壮烈な人生を掘り起こすなど、今回の連絡所による報告は、田中記者の仕事を超えた熱意に負うところが大きいものでした。あらためて誌面を借りて感謝を申し上げます。

毎日新聞　2025（令和７）年10月６日（月）夕刊

Topics　シベリア抑留死、DNA鑑定で特定

遺骨を学院記念碑に収納

廃校から80年　ハルビン学院卒業生

記念碑祭を終わるにあたり「連絡所からのご挨拶」（要旨）

戦後、哈爾濱学院は、1946年に豊橋で愛知大学を開学した東亜同文書院のように、後継学校を持つことができませんでした。後輩がいないという同窓会の危機感は大きく、実に1970年代半ばまで「学院再建」問題を巡り熱い議論が続き、この議論が求心力となって同窓会の結束はますます強固なものとなっていきました。

創立60周年（1980年）を機に、ついに「再建」をあきらめた同窓会は、「再建」から「歴史に名を刻む」という目標に大きく舵を切りました。それが『哈爾濱学院史』、「顕彰基金」、「学院記念碑」の３つに繋がります。『学院史』（1987年刊行）は満洲研究に必須の資料となり、上智大学に寄託した『顕彰基金』（1990年）は、その果実により毎年哈爾濱学院の名前を冠したシンポジウムが開催され、ロシア語学科成績優秀者３名にも奨学金が授与され、期待していたとおり学院の名を世に伝える大きな貢献をしています。

３つ目の『学院記念碑』（1999年）については、今日まで「記念碑祭」に同窓生とその家族、遺族が毎年和やかに集ってきたことはみなさんご存知の通りです。

こうした結果を顧みれば、母校再建を成就できなかった無念を、学院の名前を歴史に残すという一点に昇華させ、あえて解散の道を選び「連絡所」のみを残した同窓会の決断は見事だったとしか言いようがありません。

今後も連絡所は「名簿の管理」、「顕彰基金の見守り」の他、「記念碑祭」に代えて「記念碑の管理」を行い、これに加え「同窓生が残した資料のアーカイブ化」を考えていますので、今後ともご協力どうぞよろしくお願いいたします。（麻田）

記念碑祭の報道記事です。この他、10月11日（土）7時30分のNHKニュース「おはよう日本」でも報道していただきました。

トピックス Topics
「哈爾濱学院記念碑」祭、閉校から80年で幕

週刊 帝国データバンクニュース 10月21日

ハルビン学院 集いに幕
八王子に記念碑 同窓生わずかに
ロシア専門家養成
戦後80年

読売新聞2025（令和7）年10月31日朝刊

ハルビン学院 区切りの集い
高尾霊園 同窓生高齢化 縁はなお

東京・中日新聞　2025（令和7）年10月14日朝刊

本の紹介『さらば哈爾濱よ』大堰眞高著／風詠社 定価 1650円

著者は９期伊東亨さんのご長男章さん。本書は、晩年ウィーンで暮らし 2021 年に亡くなった章さんが、９歳まで暮らしたハルビンへの追憶を基に書いた小説。残された原稿を弟妹で力を合わせて整理し出版にこぎつけた。

同窓会は 1989 年にハルビン旅行を企画したが、伊東家は団結を示し父子５人で参加、黒河では単独で旧居を訪ねて事務局をハラハラさせた。そのときの思い出が巻末付録にあり、私も懐かしく 36 年前を思い出した。（麻田）

今回、下記の皆様からご芳志をいただきました。厚く御礼申し上げます。ありがたく記念碑の維持・管理等に使わせていただきます。

神田　　薫様（6 期 神田悌吾）	伊東　　敏様（9 期 伊東亨）
谷口　順子様（22 期 佐藤清四郎）	福原　紀子様（22 期 原田甲子郎）
吉田由紀恵様（24 期 岡本二郎）	上野　千晶様（24 期 岡本二郎）
小林　博子様（26 期 深水明美）	杉原まどか様（教員 杉原千畝）
水本智恵子様（期外 水本務）	中村　麻弓様（期外）

哈爾濱学院顕彰基金についての報告とお知らせ

■2025年度顕彰奨学金授与式　７月８日（火）

安達祐子ロシア語学科学科長（第１回受賞者）より春田櫻子さん（４年生）、菰田一陽さん（４年生）、中里桃花さん（３年生）の３名の方に奨学金が授与されました。

ロシア語学科教員のほか、神澤信行社会連携担当副学長、横山恭子学生総務担当副学長、木村護郎クリストフ外国語学部長が出席されました。

■2025年度顕彰基金記念講演会　12月11日（木）

17:20 ～ 19:00 上智大学 12号館５階

演　題　「国際報道の現場から見たロシア･ウクライナ」

講演者　権平恒志氏（上智大ロシア語学科卒、NHK報道局国際報道プロジェクト長）

【主催】哈爾濱学院顕彰基金

【共催】上智大学外国語学部ロシア語学科

入場無料、申込不要。ご興味のある方は直接お出かけ下さい！